

特別寄稿

広瀬久兵衛の府内藩財政改革

「吉兆原の開拓」を支えた、新たな人物

大分県先哲史料館史料サポーター

眞鍋 松子

一 はじめに

府内藩の財政改革で広瀬久兵衛が成功した「机張原の開拓」に、
今まで名も知れずにいた人物が新たにわかった。

それは府内藩家老職岡本主米でも、高崎村の大庄屋佐藤弥治右衛
門でもない、人知れずひっそりと粛々と生きてきた方である。

今回の執筆の経緯は、毎年机張原で執り行われる「久兵衛祭り」
に参列して久兵衛の子孫や、地元の人々との語らいの中、また久兵
衛を取り巻く人々により得られたものである。

廃藩置県により、最後の府内藩主大給近説ちかよしの後を受け継ぎ、政務
を執った養子の大給近道ちかみちがいる。近道は第八代藩主松平近壽ちかともの孫増
澤近篤ちかたかの实子、又は養子との説もあり定かな事は不明である。

その増澤家が幕末頃、机張原菅田原すがたばらに別荘があったと言う情報か
ら、頭の中を滑車が忙しく廻るかのように進んだのである。

二 菅田原について

菅田原は机張原台地の一部で、柞原八幡社から放生池を通り、女
狐はな（机張原の堀尾家前の道）を南の方向に位置する。菅田原の先
は賀来方面へ出る。

平成八年大分県教育委員会発行「九州横断自動車道関係埋蔵文化
財発掘調査報告書（五） 机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡
群」に菅田原の様子が記されている

女狐地区の周辺地域は新村・机張原・菅田原からなる台地である。
中世の高崎山城道の前進として、その出発点が豊後一宮由原八幡宮
の発展で、賀来荘、阿南荘との関係が深まって行き、由原宮と賀来
荘を結ぶ道は「善道王社道」と呼ばれたと推定。由原宮と阿南荘を
結ぶ道は机張原台地上で横断し高崎、又は宮苑へ抜ける道と推定さ
れる、と記述されている。



机張原：由原宮と阿南荘を結ぶ道
(宮苑～由布院方面へ行く道)



机張原 & 由原宮・女狐 & 菅田原と由原宮・
金谷迫 & 賀来と由原宮を結ぶ交差点

この道が女狐道で、
この奥が菅田原へ行く。

幕末の頃、ここ机張原には広瀬久兵衛が高崎村庄屋佐藤弥治衛門
の協力により、新田開発された事は周知の沙汰である。

発掘調査報告書によると、戦国期の物と思われる五輪塔・宝塔群が残っていたが中世以来継続していた近世墓地ではなく、広瀬久兵衛が机張原開発の際に、原野に放置されていた石塔を集めて供養したとの言い伝えが判明した。これは女狐集落地元の聞き込み調査によるものだと述べている。

つまり女狐・菅田原は鎌倉時代より集落の痕跡があったのである。奈良く平安時代の官道がこの台地上を通過していたのではないかと言う木村幾多郎氏の推定説を発掘調査報告書は載せている。

由原八幡宮―賀来荘 「善道王社道」

由原八幡宮―阿南荘 宮苑へ

こう考えて行くと、机張原の位置は由原八幡宮を起点に、交差する重要な交通の要衝であったと言える。

ここで「阿南荘」を説明すると、由原宮領（神宝田塗料所）で大分郡庄内町や由布院方面を指す。賀来荘は由原宮の分宮である賀来神社が鎮座しており、「善道王社道」と呼称していたかは不明であるが、由原宮と賀来神社を結ぶ道路に相応しい表現である。ここに広瀬久兵衛が机張原を開拓の地に選んだ理由が見えてくるようである。

しかし、今現在は柞原八幡宮く机張原（女狐・菅田原）く金谷迫線の交差点を右に入り、まっすぐ降りて行くと、賀来神社がある。この道を「善道王社道」と言っていたのかも知れない。

三 菅田原にあった増澤家の別荘

情報を提供して戴いた子孫の増澤氏によれば、日田の広瀬資料館経由で得た「久兵衛日記」に

慶応三年（一八六七）十月八日、増澤様（増澤寛一郎）より、中原様（府内藩家老岡本主米、松翁のこと）とご一緒に御招きされた。中原様御夫妻が、私家へ御立ち寄りになり、ヤスを連れて一緒に出かけた。

とあり、机張原での広瀬久兵衛と後妻のヤス、岡本主米や増澤家の動きが読みとれる。

続けて

同九日、菅田原（増澤寛一郎別荘）へ昨日の御礼につき、ヤスを連れて出向いた。

慶応三年と言えば机張原での開拓も一段落で、今後の成り行きに岡本主米や増澤氏へ机張原の前途を託す久兵衛の示唆が伺えるものである。時に、ヤスとの間に生まれた新一郎は三才である。

【増澤家と岡本主米の関係】

この頃岡本主米は、広瀬久兵衛とともに開拓した机張原に隣接する金谷迫中原に、庵を設け爐畑（はたけ）二町歩を家臣にも奨励している。隠居後は松翁と号し、養老扶持五十石高（現在で言う退職金や年金に相当）を新開地中原に与えられている（大分市史より参考）。

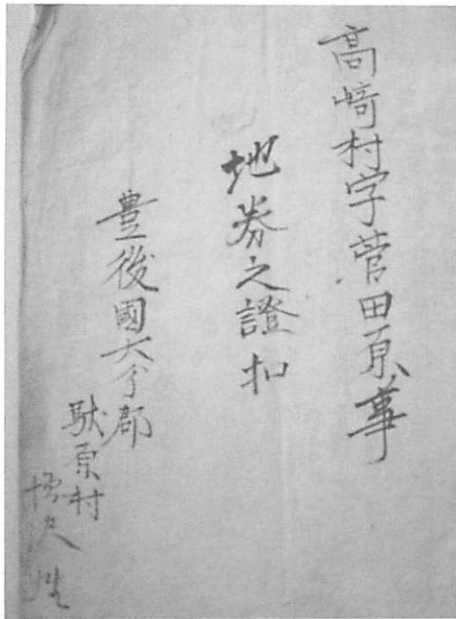
菅田原の別荘の住人増澤寛一郎は、岡本主米の三男で増澤家へ養子に入っている（増澤家ご子孫の書簡より）。所有者は増澤近篤であるが、養子の増澤寛一郎は実父の岡本主米と共に広瀬久兵衛の意

志を引き継ぎ、管理していたと考察する。

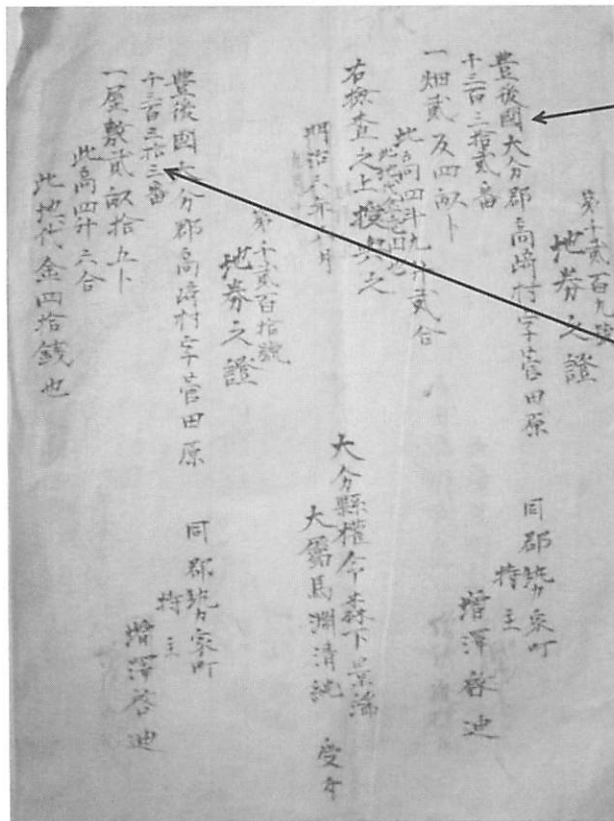
【菅田原を所有した経緯】

菅田原は地元の人によれば「シゲタバル」と読んでいる。今現在は住宅はなく、山林と化しているようである。増澤家ご子孫の書簡には廃藩置県後、家禄奉還制度（家禄五石以上を対象とした家禄税を課すこと）により、土地を放棄せざるを得なかったのではないかと推察している。その後大正年間に所有者は松田郡蔵となつていて、大分法務局で確認が取れているようである。増澤氏が所有していた地番一三三二を、そのまま松田郡蔵が所有者となつていてある。

松田郡蔵は佐伯市上浦町誌によれば、机張原開拓団の名簿に弟の松田甚蔵を明治八年に分家したと載っているから、これで上浦から机張原へ開拓団として入植したことが明らかである。



増澤家が所持している高崎村菅田原の地券証の控え



増澤氏所持の地券（菅田原と勢家町）の内訳

豊後國大分郡高崎村字菅田原千三百三拾貳番
一 畑貳反四畝歩の字が読める。

千三百三拾三番地では屋敷貳畝五歩とあり、別荘があつたことがわかる。

ゆえに菅田原は机張原の小字の開拓地であり、同じ地に別荘を構える増澤家はリゾート地ではなく、櫛の栽培に取り組み広瀬久兵衛の開拓に協力したと解釈する。

この地券証の日付（明治八年八月）は発行年数であつて、取得年数ではない事を付記しておく。しかし一方で、久兵衛が開拓の地に

吉兆原を選んだ事に、増澤家は協力し辛苦を共にしたのではないかと考察する。

四 広瀬久兵衛が吉兆原を選んだ理由とは。

柞原八幡宮の南大門は別名「日暮し門」とも言い、国重要文化財に指定されている。現存する日暮門は明治三年六月二十九日に上棟され、発願主は広瀬久兵衛嘉貞である。



柞原八幡宮の南大門（日暮門）

縦・横三間三尺・銅葺の大
門で軒の正面には雄竜・後面
には雌竜の彫刻あり。門扉・
門壁には各種の花弁・鳳凰・
鳩・鯉・その他の魚・果物・
蔬菜類を彫刻し四十面板壁に
は古代中国の聖賢や二十四考
の物語人物、日本古代人物大
和武尊から戦国時代の武将ま
で彫刻されている。彫刻師は
三人で安部文寅・木村黙齋・
福田蕉雨である。

以上、大塚高吉著「豊後画人名鑑」から引用と明記された資料に基づいて参考にしていく。

確かに、日暮門の芸術的な彫刻を眺めて見ようものなら、日が暮れてしまう程一日では見終わらないと言う意味から「日暮門」の名が付いたとも伝えられている。これは余談であったが、相当な資金を要するため、広瀬久兵衛が府内の豪商中尾喜平・幸松雄三郎の有力者が中心となって寄付を集めたと言う（「大分今昔」渡辺克己より）。これ程までに広瀬久兵衛が力を入れるには、吉兆原の開拓が如何に重要だったのかが伺い知れる。

柞原八幡宮拠点にした周辺の地名には、

東の海岸 蓮の形をした邯鄲・その先には宝崎・神崎

南東側 放生池 賀来

南西側 宮苑 東院

と言うように、柞原八幡宮領の荘園に相応しい地名が残っている。

昨年、広瀬久兵衛の御位牌が安置されている市内王子西町の「浄土寺」へ取材をさせて戴いた折、御住職の結城氏は次のように説明する。

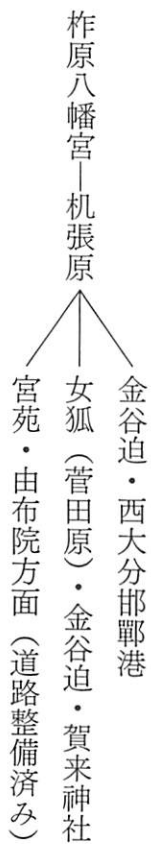
豊後の発展の起点は「柞原八幡宮」である。豊後の人々は何故「柞原八幡宮」を発展させようとしなかったのだろうか。

安部文寅^{ぶんいん}

元府内の人 大彫刻家 字は忠通 号は陽谷 明治

十八年 八十一歳で没塚道文菜居士 万寿寺に眠る。

木村黙齋はその門



この三筋の交通路が整備されれば人の流れが潤って、豊後の一宮とも言われる柞原八幡宮が栄える。その通過点が吉兆原なのだ、浄土寺の御住職結城氏は熱弁する。

つまり柞原八幡宮を意識して、広瀬久兵衛は吉兆原を開拓の地に選んだ。府内藩主近説も財政が改善出来た事の一つでもあり、これまでの経緯から「机張原」には特別な趣があったことが考えられる。それは金谷迫中原の岡本主米へ養老扶持を与えており、菅田原には増澤近篤へ畑や屋敷を与えている事などからも合点がいく。ましてや、広瀬久兵衛自身が開拓後の明治三年迄、この地に留まり住んでいたと言われている所以も納得する処である。

五 賀来神社について

最後の府内藩主大給松平近説は廃藩置県の後、故郷に帰る際に賀来桑原の庄屋に大名行列の道具一式を置いて帰っている。それが卯酉の年に行っている賀来神社の御信奉行事と合わせ、現在の大名行列の形になったようである。

大名行列は桑原旧庄屋前から賀来神社の間を練り歩き、六年に一度の行事である。

机張原の地元住民によれば、



柞原八幡宮の分宮の賀来神社
賀来の市が行われる

毎年机張原、金谷迫、八幡の人達が柞原八幡宮より御輿を担いで賀来神社まで「お下り」と称して鎮座させ、賀来神社のお祭りが始まる。祭りは一週間ほど続き終了すると、また同じ三村の人々は「お上り」と称して柞原八幡宮へお戻りする。それが生石港町でのお祭り「浜の市」が始まるのである。



生石の火王宮にある柞原八幡宮の分宮、ここで浜の市が行われる。

このように、机張原・八幡・金谷迫の人々が、賀来神社のお祭りや浜の市に関わる事は、広瀬久兵衛の柞原八幡宮に対する崇拜の念が伝わって来るようである。ここで最近まで、元大分県先哲史料館専門員をされていた加藤泰信先生の「賀来神社卯酉の神示について」の論説があるので引用しながら述べたいと思う。

加藤先生の論文は大分県総務課県史編纂班に属していた頃のものである。

【賀来神社卯酉の神事について】

大分市大字賀来に鎮座する賀来神社は、柞原八幡宮の撰社であり、武内宿祢命と建盤龍命を祭神としている。明治維新までは、善神王宮といわれたていた(原文のまま)。

祭神の武内宿祢命は、平常は柞原八幡宮に仕え九月一日〜十一日

の期間のみ還幸する。この期間が賀来の市と言われるお祭りである。六年に一度、十二支の卯・酉の年に行われる大名行列は三回行われ、六ヶ年は卯酉の年に当たる、と説いている。

室町末期く戦国期に柞原八幡宮は大友氏が保護している。江戸時代になり、日根野以来大給の代々藩主が保護政策により、浜の市は西日本三大大市の一つと言われるように繁栄した。賀来善神王（かくぜじんのう）への崇敬も厚く、その祭礼も盛んとなり、賀来の市の名で知られるようになった、と綴られている。

これで柞原八幡宮と賀来神社の関係がわかり、机張原がその交通の要所であった。だから広瀬久兵衛は机張原を開拓地に選んだのだと断言出来る。そもそも机張原を選ばせたのは「吉兆原の開拓の記」によると高崎村の大庄屋佐藤弥治右衛門である。

「府内藩記録」の「天保十四年 日記―御用留日記―」の中に、御届奉申上覚えの項目に賀来村善神王宮祭礼の賀来組預かり 高崎村大庄格佐藤与治右衛門となっている（「賀来神社卯酉の神示について」の引用より）が、多分高崎村の大庄屋佐藤弥治右衛門のことではないかと思われる。

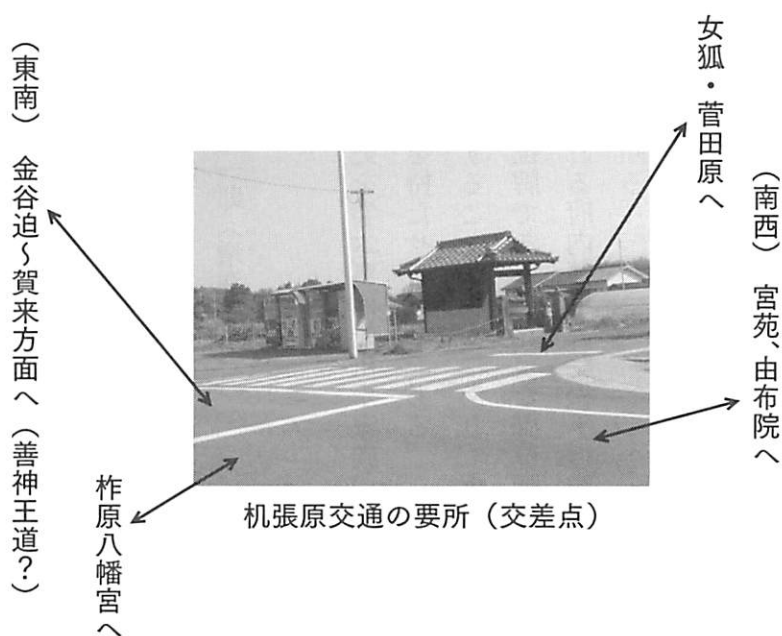
これで机張原の開拓に、府内藩家老の岡本主米や副藩主を努めた増澤家が、それぞれ庵を構えた経緯も納得出来るものである。

また大給松平近説が古里へ戻る際、大名行列の道具一式を置いて帰ったのも納得がいく。

【江戸賀来神社】

豊後府内藩主松平家は、貞享四年（一六八七）江戸上屋敷を現在

(南)



(北)

の神田淡路町一丁目に構え、安永八年（一七七九）八月大給家は賀来神社を豊後国賀来村から江戸神田淡路町の本邸内に御分霊勧請した。この年の銘が入った手水鉢は、現在鶴沼の賀来神社にある。江戸時代の地図には、豊後府内藩邸内に「善神王宮」と記入されているものがある。また、文化三年（一八〇六）に造立された神田大給

家江戸屋敷賀来神社の鳥居も鶴沼に移設されたが、最近建て替えられて廃棄された。(鶴沼を巡る千一話より)

六 おわりに

「机張原の開拓」について関係方々を始め、専門家のご指導や歴史を研究されている仲間達による叱咤激励を戴き、誠に感謝の一言に尽きるものである。

お陰で当初(平成二十三年)から広瀬久兵衛について研究に取り組み始めて、やっと納得出来る迄に辿り着いた。

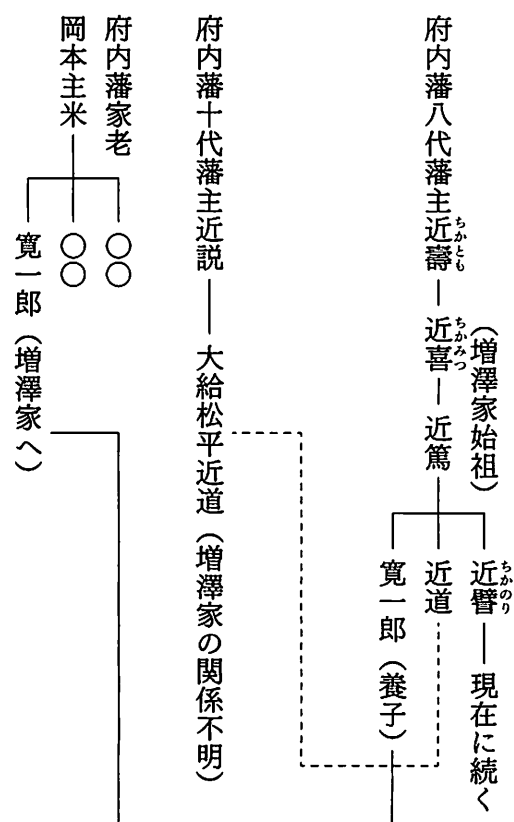
- ・ 机張原を選んだ理由
- ・ 柞原八幡宮と賀来神社の関係
- ・ 広瀬家と堀尾家の関係

・ 広瀬久兵衛の開拓を成功に導いたもの

・ 机張原で長年続く「久兵衛祭り(命日際)」の行事
更に、今回新たに開拓を支えた人物増澤氏が判明した。

この研究資料は、府内藩主をはじめ家老職こそって広瀬久兵衛を全面的に協力的体制だったことがわかった。この開拓が府内藩の将来を託した重要な事であったことを改めて認識した。こういった経緯を、机張原の地元の方々は知っていたのだろうか。改めて久兵衛の命日際には、是非とも語り伝えて欲しいものである。

【机張原の開拓に関わった府内藩の人物相関】



このように、郷土史を学ぶ事は先祖や家族、地域・社会を活気づけさせ、勇気と希望を持たせるものである。

まだまだ調査研究することが膨大にあり、大きなテーマは浄土寺にある広瀬久兵衛の御位牌である。見事な御位牌は矢張り、浄土寺の御住職結城氏が言われる府内藩主大給松平近説が作ったものなのかと、構想がグルグル回る。

微力ながら、何か地域社会にお役立て出来ればと、これからも研究活動は続く。

— 終わり —

【参考文献】

平成八年大分県教育委員会発行「九州横断自動車道関係埋蔵文化財

発掘調査報告書（五）机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡

群」 大分県埋蔵文化財センター

大分市史 昭和五十六年発行 大分市

柞原八幡宮南大門（日暮し門）について

大分市史 昭和五十六年復刻版

大分県地史 史一三二号より

※資料提供 一法師 武夫氏

「賀来神社卯酉の神示について」

元大分県先哲史料館専門員 加藤 泰信氏

上浦町誌

上浦町誌編纂委員会

「吉兆原開拓之記」（写）

堀尾 和雄氏

佐藤 末喜氏 両氏より戴く

江戸賀来神社

鶴沼を巡る千一話

かえるのブログ「大分県の史跡（賀来神社）」本人のブログ

府内藩関係筋子孫の方々より

増澤近統氏の書簡及び資料提供

広瀬久氏所持の記録書物（広瀬久兵衛とヤスの系統について）

平成二三年机張原「久兵衛の命日際」本人の取材ノートより

机張原住民及び周辺の方々の聞き込み調査より

机張原の開拓に関わる人物の年表

年号	西暦	広瀬久兵衛	佐藤弥治衛門	ヤス	府内藩 & 増澤家
寛政 2	一七九〇	久兵衛生誕			
寛政 8	一七九六		弥治右衛門生誕		
天保 元	一八三〇				
天保 2	一八三一				
天保 13	一八四二	弥治右衛門と協議の結果机張原に開拓決定。	久兵衛とともに机張原を開拓地に決定	ヤス生誕	八代藩主近訓の号令で岡本―広瀬による財政改革が始まる。
安政 2	一八五五	弥治右衛門と机張原・庄の原開墾（高崎村字新村・女狐の山林原野林田畑澤地を藩主買取）。	久兵衛の開墾に協力		高崎村字新村・女狐の山林原野林田畑澤地を藩主買取
安政 3	一八五六	溜池（豊栄池・小堤）を着手。 佐伯より第一陣の			
安政 7	一八六〇	入植者。吉兆原堤の築造 佐伯より百姓入植	放生池・御神田池を築造		
文久 3	一八六三	ヤスと再婚 七十三才		久兵衛の後妻 へ 二十一才	
慶応 元	一八六五	庄の原に通水工事を竣工		新一郎誕生	
慶応 3	一八六七	十月九日昨日の菅田原の増澤氏へ、御礼にヤスと出向く。			十月八日菅田原の増澤寛一郎氏（岡本主米の三男、増澤家へ養子）、中原様（岡本家老）と久兵衛&ヤスを招く

明治 2	一八六九			増澤寛一郎故あり別家となる。 版籍奉還
明治 4	一八七一	九月二十九日死去 八十二才		廃藩置県 増澤近篤の実子近道が府内知事を任命 大給松平近説府内を去るに当たり、賀 来神社がある賀来桑原の庄屋に大名行 列の道具一式を置いて帰る。
明治 5	一八七二			十二月二日大分郡庄内の農民が廃藩置 県に不満にて一揆を起こす。 土地所有者に地券発行することを定め る。
明治 13	一八八〇		死去 八十四歳	

※年表作成の参考資料

「吉兆原開拓之記」 堀尾和雄氏・佐藤末喜氏より戴く

大分県の歴史 山川出版社

広瀬久氏の書き物より

増澤近統氏の書簡より

狭間史談 第二号 「佐藤万里伝」 佐藤末喜氏

「府内藩」 ネット検索

大分県の史跡 「賀来神社」 筆者のブログより